

当たり前がある幸せ



「命って、どれくらい大切なのだろう」と考えてみた。あまりにも当たり前で、あまりにも大きくて、言葉にすることが難しい。家族がいること、友達がいること。そして、今自分自身がここにいるという「当たり前」を私達は大切にしているのだろうか。

私が六歳の頃、母と弟と三人で母の実家のある福島県に里帰りをした。

久しぶりに会えた祖父や伯父と一緒に夕飯を食べたり、おしゃべりをしたりと私達は楽しい時間を過ごした。

翌日の昼過ぎ、近くのショッピングモールにお昼過ぎに向かった。母が買い物をしている間、祖父と弟と私はキッズコーナーの遊具で遊んでいた。その時、ゴォーという聞いたこともないような大きな音が響いた次の瞬間、大きな揺れが私たちを襲った。その日は、2011年3月11日。何が起きたかわからず、パニックになりながらも祖父と手をつなぎ、周りの方に誘導されながら、やっとの思いで出口へ向かい駐車場へと避難できた。波打つ地面に、なすすべもなくただ必死に祖父と弟の手を握りしめていた。

聞こえる悲鳴。鳥は一斉に飛び立ち、空は紫がかったピンク色に変わり、雪が降り始めた。さっきまで楽しい時間を過ごしていたショッピングモールの姿は一瞬で変わり果てていた。混乱の中、母と無事会うことができた。母の実家の近くのその場所は内陸の方だったので、津波の被害はなかったが、壊れた町並みを前に、大変なことが起きていると感じていた。

9年前のこの体験は、忘れることのないもの、一瞬にして多くの人の日常と命が奪われるのだと、今も私の中に残っ

なかし あお
宮古島市立下地中学校3年 仲地 亜緒さん

ている。そして、今振り返ってみると様々な偶然が重なって、私は生きていられるのだと考えるようになった。あの日、あの時、あの場所にいた私が今ここで生きていることは当たり前ではない。自分だけでなく、大切な人、家族、友達、そばにいる人が今生きていることをもっと大切にしていきたいと思うようになった。

命は大切なものだ。誰もがそれを知っている。しかし、自殺や痛ましい殺人事件や事故。いじめやSNSでの心ない言葉の数々は、日々くり返されている。予想できない言葉の数々は、日々くり返されている。予想できないものに脅かされ、日常が失われている現実がある。それを見て私は、どうすることもできないやりきれない気持ちになる。

しかし、心を痛めるだけでは何も変わらない。一人の人間の命には、その人とつながる命がある。だからその命が失われた時、多くの人が悲しみ、苦しむのだろう。いつか終わりがくる命だからこそ、それまでの日々を、関わる人達を大切にしたい。他の人の痛みを、自分の痛みとして考えられる人になりたい。誰もが「命が大切であることは当たり前」ではなく「命を大切にすることが当たり前」にできるような世の中をつくっていきたいと思う。そのために私は、一日一日を大事に、感謝の気持ちを持って過ごしていきたいと思う。当たり前の日々が続いていくことが、誰にとっても幸せだ。そして、そこには一人一人の命が輝いている。

昨今、祖父が亡くなった。あの時、私の手をぎゅっと握りしめ、私と弟を必死で守ろうとしてくれた祖父の手の力強さと温かさを私は忘れない。その思いは、私の中で永遠に生き続ける。誰かを大切にしようとする思いは、次の世代に受け継がれる。かけがえのない自分の命、すべての命を大切に生きていこう。当たり前の日々の中で。

『後悔』と『願い』



テレビや新聞紙面では、今日も事件、事故のニュースが溢れている。インターネットやスマートフォンが、高校生の間でも一人一台が当たり前となったこの環境下では、そんなニュースも瞬く間に流れ、通り過ぎていく。それが、ごく日常のありふれた情景である。時

には、小さな子供が犠牲となったり、多人数が巻き添えとなった悲惨なニュースでさえも。私も、そんな悲惨なニュースを目にした時、いや一定の時間程度に、その悲惨な出来事を思い浮かべ心を痛めることはあった。でもそれはテレビやニュースの中での出来事で、結局、時間の経過とともに記憶の隅に追いやられて、その後よほど事の事が無い限り、私の口から発せられる事は無くなってしまふ。一つ一つの事件や事故の裏に、どれだけの被害者やその遺族、関係者の悲しみが隠されているかも考えもしないままに。それは、自分が事件や事故の当事者になる事などあり得ないという自信にも似た感情さえ存在していたからなのかも知れない。言うならば、アクション映画を見ながら、映画にのめり込みつつも、自分に置き換えた主人公は必ず生き残れるといった感覚。現実味が無いからこそ存在する自信とでも言うか……。

しかし、そんな根拠の無い自信は、本当に簡単に呆気なく崩されるものだ。

私は学生である。学校での課題や調べ物の必要があって、インターネットを活用することが多い。それは、いつものようにネットで検索をしていた時、画面に「交番襲撃」の文字が流れてきた。数年前にも同じような事件が立て続けに起こった事をおぼろげに記憶していたのだが、いつもなら見出しを棒読みする程度でスルーしているところであるが、その時は少し違った。何故なら、交番勤務の警察官が襲撃された事件の一年後の警察官(被害者)家族のインタビュー記事だったからだ。私の父も警察官だ。記事の中で、被害者の奥さんは、「未だに帰って来るのを待ってしまう。」と語っている。

一年経過してさえない、突然降りかかってきた現実を受け入れられない、いや受け入れたくないとの思いなのかも知れない。

父は日頃「警察官や消防、自衛隊の職員は、その思いはそれぞれ軽重はあれど、それぞれ危険な仕事と自覚しているし、相応の覚悟を持っている。」と言う。そんな覚悟や誇りを持つ当人(父)は立派だ。でも家族の思いはそれとは違う。怪我無く、笑顔で家族の元へ帰ってきて欲しいと願うばかりだ。

全国被害者支援ネットワークの「犯罪被害者の声」には、数えきれない体験談が寄せられている。

あかみね あまら
沖縄県立那覇国際高等学校2年生 赤嶺天良さん

「犯罪被害者の声」には、これまでの私の中で、他人事として次から次へ溢れ出では通りすぎていったニュースの裏側の被害者や被害者遺族の思いが綴られている。彼らの悲しみや後悔、言葉にならない思いが無機質なはずの文字から伝わってくる。交通事故によって奪われた命。殺人、暴行によって奪われた命。どれもかけがえのない命で、誰も奪うことは許されない。どんなに加害者が謝罪しようが、罪を償おうが、失われた命や残された者の苦しみ、悲しみは決して取り戻したり、元に戻ることはない。癒されることはないのだ。

「犯罪被害者の声」で語る被害者、被害者遺族の思いとは、どの様なものなのだろうか。

当然、語るまでには長い時間と多くの葛藤があったことは想像するに難しくない。私なら出来るのか? 悲しみや憎悪を超えて出来るのか?

では何故彼らは語るのか。「犯罪被害者の声」を何度も読み返してみると、その思いを感じることが出来る。被害者や被害者遺族の「後悔」と「願い」がそこに伝わってくる。

本来なら在るはずの無い、何ら罪のない被害者や被害者遺族の「後悔」や「願い」が。

突然奪われてしまった命だからこそ、「あの時こうしていれば良かった。」「もっと話していれば良かった。」「もっと感謝を伝えてあげれば良かった。」といった「後悔」。「そういう自分の後悔を他の人にはして欲しくない」という「願い(思い)」である。

先の襲撃された警察官の奥さんがインタビューを受けた理由に「この様な事件が二度と起きて欲しくないという「願い」があったからだ。」と記されている。

私たちは、当事者になってからしか命の大切さに気付く事は出来ないのだろうか。

否、決してそうではないと思う。人間は学ぶことが出来る動物であるはずだ。私たちは歴史を学ぶ。そこから先人達が残した知恵を学び、二度と繰り返してはいけない過ちを学ぶ。これらを私たちは経験したことが無くとも理解し、社会に、自分の生活に活かすことができる。

今なら私も訴えることが出来る「命の大切さ」を。「犯罪被害者の声」を目にして、被害者や被害者遺族の「後悔」と「願い」を感じ、受け取ることが出来た今ならば。



犯罪被害者等支援シンボルマーク
「ギョっとちゃん」